

神戸大学 大学教育研究センター 大学教育研究
第 8 号 (1999年度) 2000年 3月発行：9-25

大学卒業生の学生生活評価と大学評価

岩田 弘三 (武蔵野女子大学助教授)

大学卒業生の学生生活評価と大学評価

岩田 弘三（武蔵野女子大学助教授）

1. はじめに

10年前、20年前の大学卒業生は、どのような大学生活を送っていたのであろうか。また、彼らは、自分の卒業した大学を、いかに評価しているのだろうか。さらに、それら諸項目のあいだには、何らかの関係がみられるのであろうか。本論では、以上の点に焦点を当てて分析を進めていくことにする。

ところで、われわれは1年前に、現在の在校生（現役大学生）を対象に、今回の調査項目と共通する質問内容を含んだアンケート調査を行ない、彼らが体現している学生文化の様態、自身が通う大学に対する評価などに関する分析を試みた¹⁾。さらに今回の調査対象大学は、5つの四年制大学と、2つの短期大学であるが、そのうち4つの四年制大学と1つの短期大学は、在校生調査と同一の対象校となっている。そこで本論では、現在の大学生と過去の大学生との、学生文化の様相の相違のみならず、現役大学生と卒業生とのあいだの大学評価の違いについても検討していくことにする。なぜなら、在学時代の大学評価と、卒業して社会経験を経た現在から振り返った場合の大学評価は、変化する可能性がある。具体的にいえば、在学時代には評価していなかった面が、社会人となった今からみれば、評価に値するものであったことに改めて気付くこともありうる。もちろん評価項目によっては、その逆のパターンがみられる項目も存在すると考えられるからである。本研究の最終目的の一つは、この点を明らかにすることにある。そこで今回はまず、その取っかかりをえるためにも、以上の点に関する探索的な分析を試みることにした。

なお、本論で用いるデータは、武内清を代表として1998年11～12月に実施したアンケート調査をもとにしている。研究全体の理論枠を含めて、本調査自体に関する詳細は、別論文²⁾を参照いただくとして、ここでは、今回調査対象となった5四年制大学、2短大の主立った特性だけを、表1に要約しておく。

2. 大学生活で重視している活動

まず、今回の調査対象者は、どのような活動を中心に据えて、大学生活を送っていたのかをみてみよう。今回のアンケート調査では、表2に示した、「学業・勉強」、「サークル」、「アルバイト」、「趣味」、「友人との交遊」、「異性（恋人）との交際」、「ダブルスクール」の7項目について、「大部分」、「かなり」、「少し」比重を占めている、「ほとんどなし」の4段階評価で質問を行った。同様に表2に示してあるとおり、つぎの15項目についても、大学在学中にどの程度の活動を行なったかを、「かなりした」、「まあした」、「あまりしなかった」、「ぜんぜんしなかった」の4段階評価で聞いている。「家で講義や専攻分野に関する本」や、「小説・評論・随筆などの本」を読んだかどうか。「体育会や運動部での活動」、「体育・運動系のサークル活動」、「文化関係のサークル活動」、「大学の自治会・学友会活動」、「ボランティア・社会奉仕活動」をしたかどうか。「大学の先生にいろいろ相談したり話をしたり」、「ショッピング」、「コンサート視聴」、「ディスコやカラオケ」に行ったり、「マージャンやパチンコ」をしたり、「友人とお茶やお酒などを飲み」、「あるいは「旅行」に行ったり、「就職のための勉強や準備」をしたかどうか。

表1. 調査対象校のプロフィール

	B大学	F大学	J大学	L大学	T大学	U大学	P大学	全体
教育年数	4年制	4年制	4年制	4年制	4年制	短期大学	短期大学	
設置主体	国立	私立	私立	私立	私立	私立	私立	
所在地	関東	東京	東京	九州	東京	東京	関東	
入学難易度	4	5	3	2	2	1	1	
学生総数(人)	8091	10156	3359	6214	2332	約2000	約5000	
教員一人当たりの学生数(人)	17.9	22.3	29.2	20.6	37	57	27	
サンプル数(人)	52	97	67	40	92	60	46	454
うち男子学生(人)	17	40	40	36	0	0	0	133
うち女子学生	35	57	27	4	92	60	46	321
回収率(%)	20.8	38.8	26.8	16.0	36.8	24.0	18.4	25.9

表注) 入学難易度: 5=65以上、4=64~60、3=59~55、2=54~50、1=49以下 (代々木ゼミナール調べ)。
総学生数、教員一人当たり学生数は、『大学ランキング 2000年版』、朝日新聞社、1999年による。

単純集計の結果をもとにして卒業生全体の状況をみれば、学生生活のなかで、もっとも中心的な位置を占めていた活動は、「友人との交遊」であった(この活動が大学生活のなかで「大部分」または「かなり」比重を占めていたと応えた学生の比率は、82.6%)。ついで、「勉強」(以下、同様の比率は、64.3%)、「趣味」(40.3%)、「サークル」(39.0%)、「アルバイト」(32.4%)、「異性との交際」(31.5%)とつづく。また、資格取得などを目指し、大学の授業と並行して専門学校に通う「ダブルスクール」に、力を入れていた学生は、ごく少数であった(2.0%)。

ところで、われわれは、現在の現役大学生について、以上と同様のアンケート調査を行なった。それとの比較でいえば、「友人との交遊」、「勉強」、「サークル」活動を重視していた卒業生の比率は、現在の大学生と比べて有意に高くなっている。その逆に、「趣味」、「アルバイト」を重視していた卒業生の比率は、現役大学生と比べて有意に低い。また、「異性との交際」、「ダブルスクール」を重視していた卒業生の比率は、現役大学生と比べて幾分低めではあるが、ほとんど差がみられない。その結果、大学時代に力を入れた活動の順位としては、現在の大学生活では、「サークル」活動は順位的には6番目と、「アルバイト」、「異性との交際」の下に位置づけられているのに対し、過去においては「友人との交遊」、「勉強」、「趣味」に次ぐ、4番目に重視された活動となっている。

さらに今回のアンケート調査の結果についての報告をつづけると、以上の活動のうち、現在の生活のなかでもっとも役に立っている活動は、「友人との交遊」である(この活動が現在の生活のなかで「一番役に立っている」と応えた学生の比率は37.9%、「二番目に役に立っている」と応えた学生まで含めた場合の比率は61.9%)。ついで、「勉強」がくる(以下、同様の比率は、それぞれ23.3%と44.7%)。「サークル」(13.9%と23.0%)、「アルバイト」(7.5%と18.7%)、「趣味」(4.8%と16.9%)、「ダブルスクール」(3.1%と5.3%)、「異性との交際」(2.0%と6.0%)などは、それほど現在の生活に役立っていない、と評価されている。そして、当然予想される結果として、大学時代に重視していた活動ほど、他の活動より現在の生活に役立っていると応えた人が多い。

ついで、学生時代に行なった活動についてみれば、「友人とお茶やお酒などを飲み」に行く、という学生文化が、もっとも繁栄していたことが分かる(「かなり」、「まあ」した人の比率は83.2%、以下同様)。同じく、「旅行」(63.6%)、「ショッピング」(71.1%)、「コンサート視聴」(49.4%)、「ディスコやカラオケ」(31.3%)文化に浸っていた人もかなり多い。つまり、多くの人々は、「遊び文化」中心の学生生活を謳歌していた。ただし、今回の調査対象には女性が多いこともあって、「麻雀・パチンコ」文化(14.1%)は、「遊び文化」に分類できると考えられる項目のなかでは、唯一マイナーな活動となっている。一方、「小説・評論・随筆などの本」(59.7%)のみならず、「家で講義や専攻分野に関する本」(4

6.9%)を読み、「就職のための勉強や準備」(36.8%)にいそしむ、という「まじめ型文化」とでも呼べる学生文化も、「文化関係のサークル活動」(33.4%)、「体育・運動系のサークル活動」(25.5%)、「体育会や運動部での活動」(18.1%)などの、いわゆる「サークル文化」と同程度以上に、そこそこに隆盛をきわめている。しかし、「大学の先生にいろいろ相談したり話をしたり」(18.3%)、「大学の自治会・学友会活動」(8.8%)、「ボランティア・社会奉仕活動」(6.2%)に従事することは、きわめてマイナーな学生文化であった、と考えられる。

つぎに、大学時代の活動に関する、これら22項目の関係をみていこう。まず、それらの相関関係を示したものが、表2である。なお、表では、0.4以上の強い相関がみられるものには濃いめの網かけを、0.3以上の弱い相関がみられるものには薄めの網かけを行っておいた。まず、表から分かるように、大学時代に重視した活動7項目については、在校生調査の場合と同様に、無相関な状態にあった。それゆえ、以下の分析では、それぞれ独立した項目として扱うことにする。

表2. 大学時代に行なった活動の相関係数

	大学時代に重視した活動							大学時代に体験した活動														
	勉強	ダブル スクール	サークル	アルバイト	趣味	友人	異性	専攻分野 関係の 読書	文芸書 の読書	体育会 活動	運動系 サークル 活動	文化系 サークル 活動	大学 自治会 活動	ボラン ティア 活動	先生へ の相談・ 談話	ショッ ピング	コンサ ート聴 視	ディス コ・カ ラオケ	ボラン ティア 活動	麻雀・ パチン コ	友人と 喫茶店 や飲み 屋へ行 く	旅行
重視した活動	ダブルスクール	.043																				
	サークル	-.130	-.030																			
	アルバイト	-.111	.123	-.059																		
	趣味	-.004	.146	.033	.051																	
	友人	-.084	.008	.139	.103	.233																
	異性	-.144	.004	.061	.175	.053	.225															
	専攻分野関係の読書	.481	.087	-.035	-.083	.080	-.025	-.024														
活動体験	文芸書の読書	.195	.094	.075	-.102	.165	.042	-.009	.286													
	体育会活動	-.123	.006	.178	-.057	-.046	.002	.022	-.072	.008												
	運動系サークル活動	-.067	.043	.259	.100	-.029	.145	.110	-.140	-.012	.266											
	文化系サークル活動	.021	.070	.617	-.088	.153	.104	.022	.103	.105	-.121	-.101										
	大学自治会活動	.087	-.014	.135	-.003	.032	.056	.032	.032	.002	.081	.057	.269									
	ボランティア活動	.081	.012	.192	.047	.039	-.022	-.020	.178	.079	.135	.134	.192	.235								
	先生への相談・談話	.182	.059	.105	.050	.120	.057	.078	.389	.088	.041	.109	.141	.157	.289							
	ショッピング	.059	.029	-.057	.091	.140	.308	.216	.068	.067	-.090	.175	-.037	.056	-.025	.024						
	コンサート聴視	.063	.137	-.045	.087	.262	.252	.119	.077	.055	-.183	.052	.080	.034	.047	.101	.389					
	ディスコ・カラオケ	-.143	.054	.044	.283	.065	.629	.372	-.099	.001	.005	.191	.012	.031	.001	.035	.513	.242				
	ボランティア活動	.035	.079	.080	.036	.084	.053	.011	.062	.076	.053	.002	.133	.154	.337	.164	-.022	.036	-.001			
	麻雀・パチンコ	-.309	-.001	.071	.128	.107	.017	.073	-.146	-.149	.177	.022	.005	.047	.008	.015	-.138	-.121	.153	.132		
	友人と喫茶店や飲み屋へ行く	-.138	.025	.212	.199	.146	.403	.332	-.044	.012	.039	.170	.085	.063	.038	.101	.246	.165	.417	.082	.138	
	旅行	.055	.060	.106	.201	.201	.508	.174	.085	.087	-.014	.171	.118	.145	.096	.137	.259	.233	.272	.056	-.039	.399
	就職準備	.327	.112	.085	.148	.033	.011	-.019	.171	.128	.054	.148	.080	.087	.134	.228	.085	-.027	.024	.123	-.037	.004

さらに、大学時代の体験について聞いた15項目の相関の結果を要約するために、主成分分析を行ってみた。表3から分かるように、そこでは全部で5つの成分が抽出された。それぞれの成分を構成する項目は、網かけ表示で示してある。ここでは各成分を、つぎのように命名しておいた。第1成分は、「遊び志向」成分。第2成分は「まじめ文化志向」成分。第3成分は「文化活動志向」成分。第5成分は「運動系サークル志向」成分。第4成分の主成分得点をみると、「ショッピング」、「コンサート聴視」へのコミットメントと、「麻雀・パチンコ」、「運動系サークル」へのコミットメントは、互いに相いれない活動である傾向が強いことが分かる。前者のグループには、幾分数値は低い「旅行」も含めてよいと考えられる。これら5つの項目は、いずれも1%水準で男女差がみられた項目である。5%水準でも、結果はまったく同じである³⁾。さらに、これらの項目は、いずれも第1成分(「遊び志向」成分)での主成分得点も高く現れている。それらを総合して考えると、第4成分は、遊び文化志向のなかでも、女性中心の遊びと、男性中心の遊びを分ける成分であると思われる。そこで、表中では、とりあえず「女性型遊び志向」成分と名付けてある。ただし、上に示した見方

が正しいとすれば、活動形態における男女差をとりたてて問題にしない場合には、第4成分は、第1成分（「遊び志向」成分）以上の情報をもたないと考えられる。それゆえ本論では、第4成分は、分析には用いないことにした。

表3. 大学時代に行なった活動の主成分分析

	主成分得点				
	主成分				
	遊び志向	まじめ文化志向	文化活動志向	女性型遊び志向	運動系サークル志向
専攻分野関係の読書	-.066	.794	.064	.069	-.179
文芸書の読書	.042	.671	-.115	.056	-.091
体育会活動	.001	.004	.029	-.370	.663
運動系サークル活動	.204	-.060	.054	.171	.763
文化系サークル活動	.121	.096	.643	-.047	-.380
大学自治会活動	.040	-.095	.752	.040	.061
ボランティア活動	-.050	.238	.613	-.007	.275
先生への相談・談話	.114	.533	.377	-.030	.141
ショッピング	.420	.015	-.064	.634	.107
コンサート聴視	.333	-.017	.116	.627	-.150
ディスコ・カラオケ	.759	-.071	-.053	.059	.069
麻雀・パチンコ	.362	-.169	.062	-.899	.006
友人と喫茶店や飲み屋へ行く	.788	.028	.045	-.037	.033
旅行	.585	.178	.169	.233	.082
就職準備	.024	.468	.123	.024	.314
固有値	2.47	1.90	1.65	1.27	1.04
寄与率	16.5%	12.7%	11.0%	8.5%	7.0%

因子抽出法: 主成分分析
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

以上の結果をもとに、第2、第3、第5成分については、濃いめの網かけで表示されている数字を重みとして、それら数字に対応する項目の合成得点を算出した（たとえば、「文化活動志向」に関連する第3成分については、 $(0.643 \times \text{「文科系サークル活動」} + 0.752 \times \text{「大学自治会活動」} + 0.613 \times \text{「ボランティア活動」}) / (0.643 + 0.752 + 0.613)$ ）。なお、第1成分の下位成分と考えられる第4成分を分析で用いない代わりに、第1成分については、第4成分の項目を取り込む意味でも、薄めの網かけで表示されている数字まで含めた項目の重みで合成得点を算出することにした。そして、大学時代の活動経験については、それら合成得点で求められた4成分を中心に、以後の考察を進めていくことにする。

3. 大学活動の比重と活動経験の関係

ここで、学生の生活習慣を総合的に捉えるために、大学活動の比重と、活動経験の関係を、表4でみておこう。表の見方は以下のとおりである。先述のように、われわれのアンケート調査票では、「勉強」、「ダブルスクール」、「サークル」、「アルバイト」、「趣味」、「友人」、「異性」の7つの活動について、大学生生活のなかでどの程度比重を置いていたかを、4段階評価で応えてもらっている。そこで、各被験者個人ごとに、これら7つの活動のうち4段階評価の結果がもっとも高かった活動を抽出してみた。たとえば、表中(2)の「勉強・友人」は、これら両活動の比重が、他の活動以上に高かった、つまり「勉強」+「友人」中心の大学生活を送った卒業生グループである。このグループについて、「遊び志向」がどの程度強いのかを平均値で表した数字が、2.47という数である。数値は、1～4の振れ幅で値が高くなるほど、学生たちの、その活動に対する志向が強いことを表している¹⁾。なお、表では、大学生活に比重をおいた活動については、10名以上のケース数があったもののみを表示しており、ここでの分析では、本調査の全サンプル数454人中、66.7%（303名）がカバーされていることになる（ただし、表4では、たとえば「勉強+友人」グループの分析対象人数は、34名となっているが、「遊び志向」に関連する質問項目のいくつかは無回答であった人1名が、表からは除かれていることに

注意を要する)。

表4. 大学時代に比重をおいた活動と活動の志向性

		大学活動の志向性			
		遊び志向	まじめ志向	文化活動志向	運動系サークル志向
大学時代に比重をおいた活動	(1)勉強	N 60 平均値 2.20 標準偏差 .48	60 2.56 .54	60 1.56 .61	59 1.44 .63
	(2)勉強・友人	N 34 平均値 2.47 標準偏差 .47	33 2.41 .60	34 1.35 .48	34 1.51 .70
	(3)勉強・趣味・友人	N 13 平均値 2.42 標準偏差 .32	13 2.53 .53	13 1.20 .30	13 1.16 .39
	(4)勉強・サークル	N 11 平均値 2.21 標準偏差 .51	11 2.69 .52	11 1.61 .42	11 2.19 .95
	(5)勉強・サークル・友人	N 16 平均値 2.53 標準偏差 .38	16 2.67 .60	16 2.09 .90	15 1.92 .90
	(6)サークル	N 25 平均値 2.31 標準偏差 .48	25 1.97 .43	25 1.88 .78	25 2.14 1.00
	(7)サークル・友人	N 24 平均値 2.71 標準偏差 .41	24 2.29 .48	24 1.64 .69	24 2.44 .95
	(8)サークル・趣味・友人	N 13 平均値 2.67 標準偏差 .37	13 2.18 .42	13 1.99 .41	13 1.59 .91
	(9)アルバイト・友人	N 15 平均値 2.66 標準偏差 .75	15 2.07 .46	15 1.09 .20	15 1.55 .63
	(10)趣味	N 12 平均値 2.34 標準偏差 .59	12 2.24 .55	12 1.35 .38	12 1.08 .29
	(11)趣味・友人	N 11 平均値 2.57 標準偏差 .51	11 2.38 .47	11 1.28 .37	11 1.55 .79
	(12)友人	N 55 平均値 2.75 標準偏差 .49	57 2.26 .55	57 1.52 .57	57 1.71 .74
	(13)友人・異性	N 11 平均値 2.55 標準偏差 .59	11 1.90 .38	11 1.12 .27	10 1.47 .52
合計		N 300 平均値 2.48 標準偏差 .52	301 2.34 .56	302 1.54 .62	299 1.68 .82

表では、ここで抽出したサンプル全体（表最下段の「合計」欄）の平均より高い数値を示した項目には、その数値の下にアンダーラインを引いておいた（本調査のサンプル全体の平均をとっても、結果はほとんど変わらない）。まず、「文化活動志向」と「運動系サークル志向」についてみると、当然のことながら基本的には、表中の(4)～(8)のグループのように、「サークル」にウエイトをおいた大学生生活を過ごした人で、強くなっている。同様に、「まじめ文化志向」は、(1)～(5)といった「勉強」にウエイトをおいた大学生生活を送った人で、強くなっている。つまり、大学時代に比重をおいた7つの活動との関連でいえば、「文化活動志向」と「運動系サークル志向」は、「サークル」と、「まじめ文化志向」は「勉強」とほぼ一致する²⁾。一方、「遊び志向」が強いグループは、(5)、(7)、(9)、(11)、(12)、(13)であるが、いずれも「友人」との交遊を重視したグループとなっている。しかし、(2)～(4)のように、「友人」のみならず「勉強」にも比重をおいた大学生生活を送っていた人たちの「遊び志向」は、それほど高くない（同様に、合計以上の数値を示しているグルー

ブについて比較すれば、(5)は、他のグループに比べて値が幾分低い)。こうしてみると、「友人」関係に重きをおいた学生生活を送っていた学生は、2つの集団に分化していたことになる。つまり、勉強も遊びも行っていたグループと、勉強はあまりせず、遊び友達との交遊に耽っていた学生群である。この意味で、「遊び志向」は、大学生活における「友人」との交遊重視派の、サブグループを導き出す変数と考えられる。そこで、以上を勘案して、以後の分析では基本的には、「文化活動志向」と「運動系サークル志向」は、大学時代に比重をおいた7つの活動のうち「サークル」で、「まじめ文化志向」は「勉強」で代用することにし、活動志向関係の変数としては、分析によっては「遊び志向」だけを用いることにした。

4. 卒業生による大学評価

つぎに、卒業生が母校に対して下した評価についてみてみよう。今回のアンケート調査で、この点に関する質問項目は、表5に示した19項目が、それに該当する。具体的にいえば、「おもしろい授業があったか」、「広い知識や専門知識が得られたか」、「ゼミ形式の授業はよかったか」、「先生が授業に熱心であったか」、「授業全般に満足したか」、さらには「校舎・教室」、「図書館」、「食堂」、「購買部」、「部やサークル活動の場、部室」、「大学周辺の環境」、「学科やクラスの友人関係」、「サークルの人間関係」、「先生との関係」、「大学職員の対応」、「大学全体の雰囲気」、「卒業した専攻を選んだこと」、「その大学を卒業したこと」に満足しているかどうか、について5段階評価で聞いた質問項目である。

表5. 大学評価についての相関係数

	その大学を卒業したこと	専攻分野	雰囲気	校舎教室	図書館	部室	周辺環境	友人関係	サークルの人間関係	先生との関係	大学職員の対応	おもしろい授業	広い知識	専門知識	語学授業	ゼミ形式	先生熱心
専攻分野	.824																
雰囲気	.822	.363															
校舎教室	.311	.183	.484														
図書館	.268	.135	.345	.482													
部室	.123	.091	.193	.299	.329												
周辺環境	.389	.207	.422	.378	.310	.250											
友人関係	.395	.225	.427	.208	.126	.085	.264										
サークルの人間関係	.322	.168	.334	.061	.160	.145	.155	.388									
先生との関係	.368	.350	.404	.202	.199	.125	.232	.429	.209								
大学職員の対応	.330	.266	.354	.290	.299	.139	.300	.277	.235	.381							
おもしろい授業	.385	.383	.358	.291	.176	.032	.227	.334	.195	.325	.230						
広い知識	.382	.348	.330	.241	.162	.051	.224	.296	.121	.329	.206	.546					
専門知識	.351	.308	.262	.175	.115	-.014	.128	.323	.085	.348	.187	.442	.531				
語学授業	.269	.257	.260	.198	.163	.092	.176	.085	-.001	.166	.214	.242	.342	.271			
ゼミ形式	.351	.269	.288	.096	.165	.024	.100	.264	.255	.466	.230	.296	.260	.273	.205		
先生熱心	.344	.364	.385	.223	.196	.040	.190	.318	.169	.502	.332	.452	.400	.428	.299	.384	
授業満足	.479	.427	.500	.329	.254	.119	.323	.249	.211	.398	.353	.528	.590	.474	.381	.300	.698

ここでもまず、単純集計の結果をもとに、卒業生全般の大学評価の様子を示しておこう。第1に、今回は、「校舎・教室」、「図書館」、「部室」といった3項目について、大学の施設設備に対する満足度を聞いている。これら施設設備についてみると、「部室」を除けば、概して満足できるものであったと応えている（「校舎・教室」に満足している学生は60.4%に対し、不満足者は13.5%、同様に「図書館」では54.8%に対し14.3%、「部室」については18.5%に対し27.5%）。また、「大学の周辺環境」に対する評価も高い（61.0%に対し18.0%）。第2に、「おもしろい授業」があり（肯定者81.7%に対し否定者5.3%、以下同じ）、「広い知識」（60.4%と10.4%）や「専門知識」（61.9と11.7%）が得られ、「先生は授業に熱心」であり（57.3%と8.1%）、「ゼミ形式の授業」は有意義であった（42.3%と16.2%）、と評価されており、「授業全般に対する満足度」も高い（45.4%と18.7%）。ただし、「役に立つ語学の授業」だけは少なかった（25.1%と46.7

%)と評価されている。第3に、「大学職員の対応」についても満足度はそれほど高くない(29.5%と17.8%)。しかし、以上のような不満はみられるものの、第4に、人間関係については、「学科やクラス」(71.0%と7.0%)、「部やサークル」(48.2%と5.5%)、「先生」(42.5%と11.9%)、いずれに対しても満足しており、「大学全体の雰囲気」(65.2%と11.4%)、さらには、「自分が選択した専攻分野」(67.8%と8.2%)、「自分が卒業した大学」(71.6%と7.3%)に入ったことにも満足している。つまり、大学生活全体に対しては、満足している学生が大半を占めている。

少数の項目の入れ換えを除けば、以上の項目についても、われわれは、現在の大学生について同様のアンケート調査を行なった。ここでも、その結果と比べてみると、以下に示す項目を除けば、全ての項目で、卒業生の方が、大学に対する評価は高かった。とくに、「校舎・教室」、「大学の周辺環境」に対する評価は、現役の大学生では、満足している人の比率が50%を切っていたのに対し、卒業生の場合は評価が逆転し、満足できるものであったと応えた人の割合は半数を越えている。ただし、「専門知識」が得られたかどうかについては、在校生とのあいだに差がみられなかった。

つぎに、大学評価に関するこれら19項目の関係をみていこう。まず、それらの相関関係を示したものが、表5である(この表でも、0.4以上の強い相関がみられるものには濃いめの網かけを、0.3以上の弱い相関がみられるものには薄めの網かけを行っておいだ)。さらに、ここでも、この結果を要約するために、主成分分析を行ってみた。表6から分かるように、全部で4つの成分が抽出された。それぞれの成分を構成する項目は、網かけ表示で示しておいた。第1成分は、大学の「設備環境」に関する成分である。同様に、第2成分は「授業」関連、第3成分は「友人関係」、第4成分は「教職員」関係の成分であると考えられる。以上に示した4つの成分から、大学評価意識が形成されている点は、在校生調査の結果と同等である。なお、大学や学科に対する満足度、つまり大学生活全般の満足度は、授業関連因子(第2成分)とも結びつきをもつが、どちらかといえば友人関係因子(第3成分)によって規定される部分が大きいの、という結果が出ている。この点についても、在校生調査と同じ結果が観察される。つまり、今回の大学評価調査項目に限って言えば、大学評価意識の構造は、在校生、卒業生を問わず共通したものであることが分かる。なお、以下の分析では、ここでも、表6の結果をもとに、濃いめの網かけで表示されている数字を重みとして求められた4成分を中心に、考察を進めていくことにする。

表6. 大学評価についての主成分分析

	主成分得点			
	学業	設備環境	教職員	友人関係
おもしろい授業	.672	.101	.178	.161
広い知識	.778	.104	.124	.011
専門知識	.745	-.052	.182	.062
語学授業	.454	.253	.275	-.297
ゼミ形式	.191	-.028	.721	.220
先生熱心	.480	.111	.622	.015
授業満足	.674	.282	.325	.093
校舎教室	.209	.761	.043	-.029
図書館	.095	.724	.171	.001
部室	-.121	.614	.017	.058
周辺環境	.259	.584	-.089	.301
友人関係	.283	.089	.239	.693
サークルの人間関係	-.051	.078	.197	.799
先生との関係	.249	.124	.705	.245
大学職員の対応	.114	.455	.478	.194
雰囲気	.304	.545	.290	.418
専攻分野	.609	.071	.108	.312
その大学を卒業したこと	.497	.304	.134	.517
固有値	6.03	1.83	1.37	0.95
寄与率	33.5%	10.1%	7.1%	5.3%

因子抽出法: 主成分分析
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

5. 卒業年度別の比較

今回の調査は、卒業年度でいえば、約10年前の卒業生と、約20年前の卒業生の、2つのグループを対象としている。ここで、それらグループの違いをみておこう。まず、大学時代に重視した活動についていえば、10年前卒業生の方が、20年前卒業生に比べて、1%水準で有意に、「アルバイト」文化が繁栄していた（男女別にみても、女子卒業生の場合は1%水準で、男子卒業生の場合は5%水準で、有意差が観察される）。

さらに、大学時代に行なった活動については、女子卒業生に限った特徴として、10年前卒業生の方が、20年前卒業生に比べて、1%水準で有意に「遊び志向」が強い傾向がみられた。「遊び志向」を構成する質問項目にまで下りて、女子卒業生の特徴を確認すれば、「コンサート視聴」には、世代間格差が観察されなかった。また、「麻雀・パチンコ」は5%水準で有意に、古い世代の方が活発になされていた。しかし、それ以外の「遊び志向」成分、つまり「ショッピング」、「旅行」（以上1%水準で）、「ディスコ・カラオケ」、「友人とお茶やお酒などを飲みに行く」（以上5%水準で）などは、いずれも若い世代の方が有意に活動度が高い。同様に、大学時代の活動体験について有意差がみられる主立った項目を拾っておくと、「就職準備」活動についても、男子卒業生は5%水準で、女子卒業生では1%水準で、全体としては1%水準で、若い世代の活動度が高い。加えて、とくに女子卒業生の特徴として、「体育会や運動部での活動」は、古い世代の方が1%水準で有意に高い。ただし、有意差は観察されないものの、「体育・運動系のサークル活動」は、若い世代の方が活発に行なわれている。そして、それら2つの項目の合成変数である「運動系サークル志向」には、有意差が認められないことから、よく指摘されるように、時代が新しくなるにつれ、運動部・体育会から体育系サークルへの移動傾向が、われわれのデータからも確認される。有意差は出ていないが、同様の傾向は男子卒業生についても観察できる。

一方、「ダブルスクール」、「サークル」、「アルバイト」、「趣味」、「友人との交遊」、「異性との交際」の7つの活動のうち、現在の生活のなかで「勉強」が、一番役に立っていると応えた人の比率は、卒業年次別にみて、5%水準でも有意差は観察されなかった。さらに、二番目に役に立っていると応えた人まで含めた比率について検討しても、同じことであった。同様に、他の6活動についても、いずれも有意差は認められなかった。また、大学評価についていえば、1%水準で有意差がみられた項目は、「交遊」関係への評価だけであった⁶⁾。

以上より、大学時代に隆盛をきわめた学生文化としては、「アルバイト」文化と、「遊び志向」文化、大学評価については、「交遊」関係への評価については、世代差を考慮する必要がある。しかし、それ以外の項目については、世代差はそれほど問題にならないことが分かった。そこで、以下の分析では、上の点を留意しつつも、基本的には、10年前卒業生と20年前卒業生を区別せずに扱っていくことにする。

6. 学生文化と大学生生活評価

それでは、大学生生活に比重をおいた活動（どのようなタイプの学生文化に浸っていたか）と、現在の生活のなかで役に立っている大学活動とのあいだには、何らかの関係がみられるのだろうか。表7でみていこう。ここでは、表4と同じグループを用いて、解析を進めることにする。まず、(5)「勉強+友人」中心の大学生生活を送ったグループを例にとつて、表の見方を説明しておこう。表4の説明で先述したように、「勉強+友人」の欄は、「勉強」と「友人」の比重が、他の活動以上に高かった卒業生グループを示している。そのうち、「友人」との交遊が、現在の生活のなかでもっとも役に立っていると応えた人は、21名（63.6%）いた。同様に、「勉強」が、もっとも役に立っていると応えた人は11名（33.3%）、「アルバイト」は1名（3.0%）であった。なお、表7では、「大学時代に比重をおいた活動」が、「現在の生活でもっとも役に立っている活動」と一致している回答欄には、網かけを施してある。

表7. 大学時代に比重をおいた活動と現在の生活で役立っている活動

		現在の生活のなかでもっとも役立っている活動							合計	
		勉強	ダブル スクール	サークル	アルバイト	趣味	友人	異性		
大学時代に 比重をおいた活動	(1)勉強	度数 (比率)	27 84.0%		1 2.0%	3 6.0%	4 8.0%	14 28.0%	1 2.0%	50 100.0%
	(2)サークル	度数 (比率)	1 4.2%		15 62.5%	1 4.2%		7 29.2%		24 100.0%
	(3)趣味	度数 (比率)	4 33.3%	1 8.3%			7 58.3%			12 100.0%
	(4)友人	度数 (比率)	4 7.5%	1 1.9%	4 7.5%	2 3.8%		42 79.2%		53 100.0%
	(5)勉強・友人	度数 (比率)	11 33.3%			1 3.0%		21 63.6%		33 100.0%
	(6)勉強・サークル	度数 (比率)	5 45.5%		6 54.5%					11 100.0%
	(7)サークル・友人	度数 (比率)	3 12.5%	1 4.2%	11 45.8%	1 4.2%		7 29.2%	1 4.2%	24 100.0%
	(8)アルバイト・友人	度数 (比率)		1 6.7%		9 80.0%		5 33.3%		15 100.0%
	(9)趣味・友人	度数 (比率)		1 9.1%		1 9.1%	3 27.3%	8 54.5%		11 100.0%
	(10)友人・異性	度数 (比率)	2 22.2%			2 22.2%		4 44.4%	1 11.1%	9 100.0%
	(11)勉強・サークル ・友人	度数 (比率)	6 31.3%		6 27.5%			5 31.2%		16 100.0%
	(12)勉強・趣味・ 友人	度数 (比率)	6 54.5%				2 18.2%	3 27.3%		11 100.0%
	(13)サークル・趣味 ・友人	度数 (比率)	1 8.3%	2 16.7%	1 8.3%		1 8.3%	8 50.0%	1 8.3%	12 100.0%
合計		度数 (比率)	69 24.6%	7 2.5%	44 15.7%	20 7.1%	17 6.0%	120 42.7%	4 1.4%	281 100.0%

大学時代に比重をおいた活動は、ケースが10人以上のもののみを取り出している。なお、「友人・異性」に比重をおいていた人は11人いたが、現在の生活に役立っている活動を挙げていない人が2名存在するので、表では9名となっている。

表からは、つぎのような傾向がみてとれる。まず、表中の(1)～(4)についてみてみよう。相対的な意味で他の活動に比べて、「勉強」、「サークル」、「趣味」、「友人」のいずれかの活動に、特化した大学生活を送っていた学生は、卒業後もそれらの活動を高く評価する傾向が強い。同様に、表全体にわたる傾向として、大学時代に中心に行なっていた活動を、卒業後も高く評価していることが、ここからも分かる。もちろん、大学時代に全くといってよいほど行なうことのなかった活動は、それが現在の生活に役立っていると評価しようがないので、この結果は一面では当然の傾向ともみなせる。

つぎに大学時代に2つ以上の活動を並行的に、中心に据えた生活を送っていた学生についてみてみよう。まず、(5)をみると、「友人」の方が「勉強」より高い評価を受けている。同様に、(6)をみると、「勉強」と「サークル」は同程度の評価を受けている。(7)をみると、「サークル」の方が「友人」より高い評価を受けている。(8)をみると、「アルバイト」は、「友人」より高く評価されている。(9)、(10)をみると、「友人」の方が「趣味」や「異性」より高く評価されている。(11)をみると、「勉強+サークル+友人」グループの評価は、この3つの活動に分割されている。(12)、(13)をみると、「勉強+趣味+友人」グループでは、「勉強」に対する評価、「サークル+趣味+友人」グループでは、「友人」に対する評価が高い。

以上を総合すると、第1に、「趣味」は、「勉強」、「サークル」、「友人」に比べて、現在の生活のなかではきわめて低い評価しか受けていないことが分かる。しかし第2に、上の結果だけからでは、「勉強」、「サークル」、「友人」の評価は、幾分入り組んでみえる。そこで、つぎのような再集計を行なうことにした。まず、「勉強」と「友人」をともに中心に据えた大学生活を送っていた人は、表中の(5)、(11)、(12)に含まれる人たちである。その3つを合計すると、「勉強」評

価派は22人、「友人」評価派は29人となり、「友人」への評価が高い。同様の比較を、(6)、(11)の数字をもとに行なっていくと、「勉強」(10人)と「サークル」(12人)では、「サークル」への評価がやや高い。さらに、(7)、(11)、(13)を合計すると、「サークル」と「友人」(ともに18人)は、同程度の評価を受けている。

人数的な意味で、学生生活のなかでメジャーな活動である「勉強」、「サークル」、「友人」、「趣味」、「アルバイト」の5つの評価については、表7から明らかになった。しかし、マイナーな活動である「異性」と「ダブルスクール」については、表7だけからでは、その評価がうかがい知れない。そこで、つぎのような集計を行なってみた。他の活動とのコンビネーションは問わず、少なくとも一面で、「ダブルスクール」中心の学生生活を送っていた人は、5人いた。そして、そのうち60.0%は、現在の生活のなかで「ダブルスクール」がもっとも役立っていると応えている。同様の数字を算出した場合に、二番目に高い数値を示した「友人」は、49.0% (249人中) に過ぎない。このことを考えれば、学生のサンプル数の希少さは別にして、「ダブルスクール」に対する評価は、それを積極的行なっていた学生のなかでは、きわめて高いことが分かる。一方、「異性」についてみれば、同様の数値は4.9% (82人中) であり、学生時代にそれに耽っていた学生からすらも、低い評価しか受けていない。

以上をまとめると、「サークル」と「友人」を筆頭として、以下、「勉強」、「趣味」、「異性」の順に、社会に出てからの評価が高いことが分かる。他方、「ダブルスクール」と「アルバイト」は、評価が二分される活動である。つまり、それらの活動を積極的行なっていた少数派の学生からは、社会に出てからも、「友人」以上に高い評価を受けている一方、それらの活動をそれほど積極的には行なっていなかった学生からは、ほとんど評価を受けない活動となっている。これら両活動は、キャンパス外で行なわれる可能性が高いという意味で、他の活動と比較した場合、もっともキャンパス・ライフとは縁遠い活動であることを考えれば、この結果は、大学側の学生生活へのかかわり方を議論していく上で、微妙な論点を提起していると思われる。

7. 学生文化と大学評価

それでは、大学生生活に比重をおいた活動と、卒業大学に対する評価とのあいだには、何らかの関係がみられるのだろうか。表8でみていこう。この表の見方は、以下のとおりである。たとえば「趣味」についていえば、まず、この活動に対する重視度をもとに、卒業生を趣味志向が低かった学生と、高かった学生の2つのグループに分割した。具体的には、趣味活動が学生生活のなかで、「少ししか」あるいは「ほとんど」比重を占めていなかったと応えた卒業生を、ここでは「趣味志向が低かった学生」と呼ぶことにする。一方、趣味活動が「大部分」または「かなり」の比重を占めたと応えた学生を、ここでは「趣味志向が高かった学生」と呼ぶことにする。そこで、趣味志向が低かった学生群について、卒業大学に対する「設備環境」面での大学評価を、1～5の5段階評定で表せば、その平均値は、3.42であった(対象となった人数は、262人)。一方、趣味志向が高かった学生群の「設備環境」面に関する満足度は、3.59であった(対象となった人数は、174人)。そして、それら2つの数字のあいだには、不等号の表示があるが、これは、2つの平均値間には5%水準で有意差がみられたことを示している。同様に、1%水準で有意差がみられた場合には、二重不等号をつけておいた。つまり、大学在学中に趣味文化に浸っていた卒業生ほど、設備環境面に対する大学評価が、5%水準では有意に高い。しかし、1水準では両グループで、設備環境面に対する大学評価に差は認められないことを表している。表8の見方は、「勉強」、「ダブルスクール」、「サークル」、「アルバイト」、「友人」、「異性」、「遊び志向」についても同様である。

表8. 大学時代に比重をおいた活動と大学評価の関係

数字は、大学時代に行なった活動の高低でグループ分けした集団についての、大学評価に対する平均値（最高5、最低1）。

大学評価 大学活動		勉強		ダブルスクール		サークル		アルバイト		趣味		友人		異性		遊び志向	
		低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高
学業	平均値 N	3.21 (160)	<< 3.78 (290)	3.58 (428)	3.76 (9)	3.56 (272)	3.60 (177)	3.58 (304)	3.56 (146)	3.53 (267)	3.64 (182)	3.42 (79)	< 3.61 (372)	3.52 (307)	3.64 (142)	3.53 (214)	3.62 (233)
設備環境	平均値 N	3.37 (156)	<< 3.55 (281)	3.49 (415)	3.54 (9)	3.40 (262)	<< 3.61 (174)	3.48 (291)	3.50 (146)	3.42 (262)	< 3.59 (174)	3.28 (76)	<< 3.53 (362)	3.46 (296)	3.54 (140)	3.38 (203)	< 3.58 (231)
教職員	平均値 N	3.23 (156)	<< 3.50 (273)	3.39 (411)	3.86 (7)	3.29 (257)	<< 3.56 (171)	3.38 (289)	3.44 (140)	3.36 (254)	3.45 (174)	3.37 (73)	3.40 (357)	3.35 (294)	3.50 (134)	3.31 (202)	< 3.48 (224)
友人関係	平均値 N	3.76 (158)	3.90 (282)	3.85 (417)	3.64 (9)	3.61 (263)	<< 4.19 (176)	3.83 (295)	3.87 (145)	3.81 (261)	3.90 (178)	3.50 (75)	<< 3.92 (366)	3.77 (299)	<< 4.01 (140)	3.71 (204)	<< 3.96 (233)

不等号 : $P < 0.05$ 二重不等号 : $P < 0.01$

以下、主として、1%水準で有意差が認められたもの（二重不等号のついているもの）だけを対象にして、議論を進めていこう。まず、「趣味」同様、「ダブルスクール」、「アルバイト」に比重をかけた大学生を送っていたかどうかは、大学評価に影響を与えていないことが分かる。今回、大学時代の活動として取り上げた7項目のなかで、他の活動に比べて、活動場所がキャンパス外になる度合いが相対的にかなり高いのは、ダブルスクール、アルバイト、趣味の3活動であると考えられる。つまり、当然の結果とはいえ、キャンパス外活動の重視は、大学評価を低めることはあっても、高めることはないといえる。これに対し、それら以外の活動、すなわちキャンパス・ライフとして成り立つ活動は、少なくともいずれかの側面における卒業大学への評価を、高める効果をもっている。第1に、「友人」、「異性」との交遊志向や「遊び志向」の強かった学生は、少なくとも大学生活における友人関係面での満足度が高くなっている。また、「友人」との交遊志向が強かったグループは、大学の設備環境への評価も高い。設備環境への評価についていえば、「遊び志向」の強い学生でも5%水準では、高い評価を与えていることは、キャンパス外のみならず、キャンパス内でも友人との遊びが営まれており、その場としての大学の設備環境、つまりキャンパス・アメニティが、重要な意味をもつ可能性があることを示唆している。第2に、サークル活動志向の強かった学生は、設備環境、教職員面についても大学評価が高い。一方、勉強文化志向の強かった学生は、学業、設備環境、教職員面についての大学評価が高い（ただし、在校生調査と異なり、友人関係面に関する大学評価については、有意差は認められなかった）。これら2つの活動を積極的行なった学生グループのみが唯一、4つの大学評価項目のうち、3つで高評価を与えている。大学が公式に参与している活動は、基本的にはこれら2つの活動であることを考えれば、そもそもそれら活動に積極的に浸った人は、大学在学時代から向学校（pro-school）的であったとも推定されるので、これは当然の結果とも考えられる。しかし、つぎに示す第3の知見と併せて考えると、無視できない問題をはらんでいるともいえる。

第3に、有意差を問題にしなければ、2つの例外を除いて、いずれの大学活動についても積極的に行動していた人ほど、全ての項目で大学に高い評価を与えている。つまり、学生を何らかの活動に積極的にかかわらせることは、大学評価を高めこそすれ、低めることはないことを示唆している。その唯一の例外が、ダブルスクール積極派の友人関係面に関する大学評価と、アルバイト積極派の学業に対する大学評価の低下傾向である。後者の関係については、在校生調査では、有意差が認められたことを考え合わせると、アルバイトと学業は、基本的には相反する活動であることが示唆される。また、ダブルスクールに時間を投入することは、孤立化傾向を促進するなど、好ましい友人関係の形成に悪影響

を及ぼす可能性があることも示唆される。こうしてみると、キャンパス外活動は、大学評価に影響を与えないのみならず、場合によっては、大学評価を低めかねない要素を内包しているともみなせる。

8. 現在の生活のなかで役に立っている大学活動への評価

ところで、現在の生活のなかで役に立っている大学活動への評価は、現在の生活の中心をどこにおいているのかという、ライフスタイルによって異なってくる可能性がある。その点を確認するために作成したものが、表9である。今回の調査では、「仕事」、「家庭」、「趣味」、「社会活動」、「その他の活動」のうち、どれを中心とした生活を現在送っているかについて聞いている。現在、仕事中心の生活を送っている人は96人いた。そのうち、31名(32.3%)の人が、大学時代の活動のなかでも、勉強が現在の生活のなかで一番役に立っていると評価している。なお、表では、サンプル全体(表最下段の「合計」欄)の比率より高い頻度を示している比率には、アンダーラインが引いてある。

表9. 現在の生活の中心と現在の生活のなかで1番役に立った活動

		現在の生活の中で1番役に立った活動							合計
		勉強	ダブル スクール	サークル	アルバイト	趣味	友人	異性	
現在の 生活の 中心	仕事	度数 (比率)	31 32.3%	2 2.1%	17 17.7%	10 10.4%	3 3.1%	32 33.3%	1 1.0%
	家庭	度数 (比率)	34 19.5%	3 1.7%	24 13.8%	9 5.2%	5 2.9%	92 52.9%	7 4.0%
	趣味	度数 (比率)	19 22.4%	6 7.1%	11 12.9%	11 12.9%	10 11.8%	28 32.9%	85 100.0%
	社会活動	度数 (比率)			1 50.0%		1 50.0%		2 100.0%
	その他	度数 (比率)	20 35.1%	3 5.3%	9 15.8%	4 7.0%	4 7.0%	17 29.8%	57 100.0%
	合計	度数 (比率)	104 25.1%	14 3.4%	62 15.0%	34 8.2%	22 5.3%	170 41.1%	8 1.9%

仕事中心の生活を現在送っている人は、学生時代の活動としては、勉強、サークル、アルバイトを高く評価する傾向がある。一方、現在、家庭中心の生活を送っている人は、友人、異性との交際への評価が高い。ただし、家庭中心のライフスタイルを取っていると答えた人の84.5% (147人) は女性であり、しかも、そのうち77.5% (114人) は主婦である。現在、仕事中心の生活を送っている人の、大学活動に対する有用度評価に、男女差が認められないことを考えれば、基本的には女性は、就職期間中は勉強やサークルやアルバイトといった大学時代の財産を中心的に活用していたものが、その後、家庭に入ることによって、異性を含む友人との交際を通して形成された、人間関係に関する財産を中心的に生かしていくようになることが示唆される。つまり、とくに就職を経験した後に、家庭中心の生活を送る女性グループにとっては、ライフステージごとに、大学時代に蓄積した有用な財産は異なってくる、といってよいものと思われる。なお、現在、趣味中心の生活を送っている人々は、大学生活のなかで、ダブルスクール、アルバイトに加え、当然のごとく趣味を高く評価している。

上でみてきたように、現在、仕事中心の生活を送っている人たちは、大学時代の活動として、勉強、アルバイト、サークルを高く評価していた。このような評価は、どの就業職種をとっても等しくみられる傾向なのであろうか。表10でみていこう。まず、現在の生活なかで1番目に役に立っている大学活動として、アルバイトを評価している職種は、技術職、事務職、販売職、単純肉体労働(製造・運搬など)の3職種である。この結果は、学生時代に現実的に従事できるアルバイト職種を考えれば、納得できる結果ともみなせる。つぎに、勉強と友人との交際の2つの活動に焦点を当ててみていくことにしよう。第一に、技術職については、勉強が現在の生活なかでもっとも役に立っていると評価してい

る人の比率は少ないものの、2番目に役に立っていると応えた人はかなりの数にのぼり、それらを合計するとサンプル全体と比べて、勉強への評価は相当高い。このことを考慮すれば、技術職と専門職は、現在の生活のなかで役に立っている大学活動として、勉強への評価が高く、友人関係への評価が低い職種とみなせる。第二に、販売職、サービス職は、その逆に、友人関係への評価が高く、勉強への評価が低い。第三に、事務職では、勉強、友人関係への評価がいずれも高くなっている。第四に、単純肉体労働従事者は、勉強、友人関係への評価がいずれも低くなっている。以上については各職種の労働内容を考えれば、比較的予測可能な結果とみなせる。しかし、管理職については、勉強、友人関係への評価がともに低く、とくに趣味を中心として、ダブルスクール、サークル、異性との交際への評価が高い。この結果を解釈するためには、もう少しデータの蓄積が必要と思われる。同様に、事務職と販売職を除けば、有職者集団でのサークルへの評価が高い。その理由についても、今後の課題として、さらなる検討が必要と思われる。

表10. 現在の就業職種と現在の生活のなかで1番役に立った活動

		現在の生活の中で1番役に立った活動							合計	
		勉強	ダブル スクール	サークル	アルバイト	趣味	友人	異性		
現在の 就業 職種	管理職	度数 (比率)	5 20.8%	1 4.2%	5 20.8%	1 4.2%	4 16.7%	7 29.2%	1 4.2%	24 100.0%
	専門職	度数 (比率)	43 37.4%	5 4.3%	26 22.6%	7 6.1%	8 7.0%	25 21.7%	1 .9%	115 100.0%
	技術職	度数 (比率)	1 20.0%		1 20.0%	1 20.0%		2 40.0%		5 100.0%
	事務職	度数 (比率)	24 27.9%	4 4.7%	5 5.8%	10 11.6%	3 3.5%	38 44.2%	2 2.3%	86 100.0%
	販売職	度数 (比率)	5 20.0%	1 4.0%	3 12.0%	4 16.0%		11 44.0%	1 4.0%	25 100.0%
	サービス職	度数 (比率)	1 14.3%		1 14.3%			5 71.4%		7 100.0%
	製造、運搬、梱包、 工事現場、清掃等の労働	度数 (比率)	1 14.3%		1 14.3%	2 28.6%		2 28.6%	1 14.3%	7 100.0%
	その他の職種	度数 (比率)	7 25.9%	2 7.4%	5 18.5%	2 7.4%	1 3.7%	10 37.0%		27 100.0%
	無職	度数 (比率)	19 15.8%	1 .8%	12 10.0%	7 5.8%	6 5.0%	72 60.0%	3 2.5%	120 100.0%
	合計	度数 (比率)	106 25.5%	14 3.4%	59 14.2%	34 8.2%	22 5.3%	172 41.3%	9 2.2%	416 100.0%

いずれにしろ、ここでみてきたように、現在の就業職種によって、大学生生活のなかでも学業に対する評価は分かれていた。それでは、その点と関連して、彼らは、どのような大学像を望ましいと思っているのだろうか。われわれは、卒業生の大学観について、3つの項目について二者択一で聞いている。第一が、「大学は学問の場であり、学生は授業や勉強中心の生活を送るべきだ」と考えるか、「大学は学問よりサークル、アルバイト、交友、旅行などさまざまな体験をする場である」と考えるか。第二が、「大学ではもっと社会に出た時に役立つ知識を教えるべきだ」と考えるか、「大学の授業は、好きなことが学べて、知的刺激になれば良い」と考えるか。第三が、「大学でも授業の出席を厳しくとるべきだ」と考えるか、「出席が少なくても、試験やレポートがよければ、良い成績を与えるべきだ」と考えるか。以上の3つである。表11は、それら二者択一の大学観について、前者のあり方（タイトな大学像）を肯定した人の比率を表示したものである。大雑把な傾向として、大学生生活のなかでの学業への評価が高かった、専門職、技術職、事務職は、タイトな大学像を肯定する傾向がみられるのに対し、学業への評価が低かった、販売職、サービス職、無職は、ルーズな大学像を肯定する意見が強い。（なお、以上の傾向とは逆に、管理職従事者の場合、学業への評価が低かったが、タイトな大学像に肯定的である。これは、自分の経験にもとづくというより、部下に対する評価がとくに大きいためと予想される。）つまり、以上の結果を総合すれば、販売職、サービス職従事者や、主婦層は、友人との交遊など、学業以外の大学活動は、

現在の生活のなかで役に立っているが、学業はあまり役に立っていないと考えており、それゆえ、それら現在の生活にとって有益性の高い大学活動に比重を置けるようなルーズな大学像を求めているともみなせる。しかも、これら職種に就職していく学生が少なくないことを考えれば、彼らの期待にどう応えていくかは、今後の高等教育のあり方を考えるうえで、大きな課題になると思われる。

表11. 現在の就業職種と大学のあり方に対する意見

現在の就業職種		学生は勉学 中心の生活 を送るべき	大学は教養教育 より社会に出た ときに役に立つ知 識を教えるべき	大学の授業 では出席を 厳しくとるべき
管理職	N	24	24	24
	比率	45.8%	62.5%	50.0%
専門職	N	112	115	114
	比率	38.4%	52.2%	42.1%
技術職	N	6	6	6
	比率	50.0%	66.7%	50.0%
事務職	N	93	95	94
	比率	38.7%	49.5%	43.6%
販売職	N	27	27	27
	比率	55.6%	37.0%	37.0%
サービス職	N	9	9	8
	比率	33.3%	33.3%	37.5%
製造、運搬、梱包、 工事現場、清掃等の労働	N	7	8	8
	比率	71.4%	50.0%	25.0%
その他の職種	N	29	29	29
	比率	62.1%	31.0%	55.2%
無職	N	128	130	130
	比率	35.9%	42.3%	43.1%
合計	N	435	443	440
	比率	41.4%	46.7%	43.4%

9. まとめ

最後に、本論で得られた知見の簡単な要約を行なっておこう。第1に、「サークル」、「友人」、「勉強」といった、キャンパス内活動は、卒業後も役に立っていると評価されているのみならず、よい大学評価にもつながる傾向が強い。ただし、「友人」と「勉強」のどちらをより高く評価するかは、現在のライフスタイル、就業職種によって異なっていた。第2に、「友人」、「勉強」とは逆に、キャンパス外活動的要素の強い活動のなかでも、「趣味」、「異性との交際」は、大学評価を高める効果をもたないのみならず、社会に出てからもあまり役立たないと評価されている。第3に、同じキャンパス外活動的要素の強い活動のなかでも、「ダブルスクール」、「アルバイト」は、それ中心の大学生生活を送った人からみれば、社会に出てからの評価が高いが、大学評価には少なくともマイナスの影響しか与えない傾向があることが、明らかになった。

ところで、本論では基本的には、つぎの2点について分析を進めてきた。第1は、卒業生が、大学4年間（短期大学の場合は2年間）をとおして、トータルな自己評価として、自身がいかなる学生文化に浸り、どのような学生生活を送っていたか。第2は、卒業生の視点からみた大学評価。以上の2つである。なお、いずれの評価についても、在校生調査が、いまだ学生生活を終えていない段階での、ある意味では過渡的ともいえる自己評価であるのに対し、卒業生調査は、学生生活を完結的・総合的に判断した上での自己評価になっている。そこが、在校生調査との大きな違いであることに留意しておく必要がある。ただし、現役在校生と比較すると、「サークル活動」の比重が幾分高いことを除けば、優勢を占める学生文化（大学生生活で重視している活動）の順位などには、基本的には変化がみられなかった。同様に、卒業生の視点からみた大学評価についても、全体としてみれば、在校生に比べて、ほとんど全ての項目で評価が高まって

いることを除けば、基本的な大学評価の認知構造に変化はみられなかった。

冒頭で述べたように、本研究の最終的な目的の一つは、卒業生調査と在校生調査の比較などをおして、在学時代の大学評価が、卒業して社会経験を経た後にどのように変化するか、といった点を明らかにすることにある。したがって、上で得られた知見は、基本的にある程度までは、卒業生調査と在校生調査が、比較可能な調査であることを示唆していると思われる。しかし、卒業前後の大学評価の変化を分析していく場合には、(1) 純粋な意味での、社会人になってからの大学の再評価のみならず、(2) 回顧的な調査に特有の「思い出の美化効果」、(3) 昨今の大学環境の変化、(4) 郵送調査にありがちなサンプルの偏り、などの要因をも考慮する必要がある。そして、今回報告した集計結果を解釈する場合にも、同様の注意が必要と考えられる。たとえば、大学時代に重視していた活動ほど、他の活動より現在の生活に役立っている、と応えた人が多い点は、(2)の効果が影響している可能性がある。また、現役大学生に比べ、卒業生の場合、総じて全ての項目で大学評価が高まっていた点などは、(2)と(4)の複合効果も考慮する必要がある。さらに、現在の現役大学生とは逆に、「アルバイト」より「サークル活動」に浸っている学生が多い点などは、(3)の反映ともみなせる。そこで今後は、それらの要因に留意しながら、(1)を抽出していくことが、最大の課題になると考えられる。

以上に示したような研究上の課題とは別に、現在の大学生活のあり方に関わる現実問題として、われわれが検討していなければならない課題もある。たとえば、卒業生調査と在校生調査との比較をもとにすると、現在の大学生は、過去の大学生に比べ、「友人との交遊」、「学業・勉強」、「サークル」活動から撤退し、「趣味」、「アルバイト」に打ち込む傾向が進行していた。つまり、キャンパス内での共同活動から、キャンパス外での個人活動へと、大学生活の比重が幾分移行する傾向が観察された。一方で、たとえば「趣味」についていえば、この活動が現在の生活に役立っていると応えた人は、きわめて少数派であった。これら2つの知見を併せて考えると、現在の大学生は、将来、社会人になってからそれほど役に立たないことを思い知らされる活動に、邁進する傾向がみられることになる。はたして、現在の大学生についても、卒業後10年、あるいは20年経過すれば、同じ思いにとらわれることになるのだろうか。かりにそうだとすれば、これはゆゆしき事態であるといわねばならない。しかし、別の可能性として、たとえば、過去において主流を始めていた趣味と、現在主流を始めている趣味は異なると考えられる。同様に、現在と将来では、ライフスタイルも異なってくると推測される。それゆえ、現在の大学生について、卒業後10年、あるいは20年後に今回と同じ調査を行えば、彼らが現在打ち込んでいる趣味は、彼らの将来の生活のなかで有用な経験として、高く評価される可能性も考えられる。換言すれば、時代とともに、社会人として役に立つ活動自体が、変化することも考えられるのである。このように、たとえば趣味に対する評価が、以上2つの方向のうち、どちらに落ち着くのかは、興味深い課題の一つである。同様に、アルバイト積極派ほど、卒業大学をマイナスに評価する傾向がみられた。最近導入が始まったインターンシップ制度は、一面では、アルバイトの制度化としての側面をもつともみなせる。そこで、アルバイトあるいはインターンシップが今後、大学評価をどのように変えるのかも、興味深い課題の一つとなる。

<注>

- 1) 在校（現役大学生）調査の概要およびその分析結果については、以下の文献参照。
 - (a) 武内清「学生文化の規定要因に関する実証的研究——15大学・4短大調査から——」、『大学論集』第29集、広島大学・大学教育研究センター、1999年。
 - (b) 岩田弘三「学生文化形成についての大学間比較に関する研究」、『大学教育研究』第7号、神戸大学・大学教育研究センター、1999年。
 - (c) 武内清「上智大学の学生文化の特質に関する考察」、『上智大学教育学論集』第33号、1999年。
 - (d) 武内清(編)「学生文化の実態、機能に関する実証的研究」(平成8～10年度文部省科学研究費補助

金（基盤研究(C)研究成果報告書）、1999年。

- 2) 前掲、武内清(編)、1999年参照。
- 3) その他、1%水準で有意差がみられた活動としては「文芸書の読書」が挙げられる。さらに、大学時代に重視した活動まで含めると、「勉強」、「友人との交遊」活動で、いずれも女性の方が有意に活発である。また、5%水準まで拡張すれば、大学時代に「アルバイト」活動を、男性が有意に重視していた傾向がみられる。
- 4) なお、調査票原本とは、高低の表記の仕方を逆に変えてある。表7、表8についても、同様である。
- 5) これらの点は、大学時代の活動経験についての4つの主成分と、大学時代に重視した活動との相関をみた表Aからも確かめられる。

表A. 大学時代に重視した活動と
大学時代の活動体験との相関

	勉強	ダブル スクール	サークル	アルバイト	趣味	友人	異性
遊び志向	-.127	.078	.118	.297	.233	.511	.373
まじめ志向	.448	.124	.079	-.025	.159	.030	.004
文化活動志向	.078	.043	.452	-.042	.124	.084	.021
運動系サークル志向	-.118	.031	.387	.036	-.047	.101	.082

- 6) ただし、この交遊関係に対する大学評価の世代差については、男女別に有意差検定を行なった結果、男子卒業生に特有の傾向であることが分かった。この主成分を構成する項目にまでさかのぼって確かめれば、古い世代の方が、「友人関係」のみならず、「自分が選択した専攻分野」、「自分が卒業した大学」といった大学生活全般に対する評価が、低くなっている。なお、「友人関係」については、女子卒業生でも同様の関係がみられる。

付記：本論は、平成11～14年度 文部省科学研究費補助金（基盤研究(C)）「卒業生の視点からみたカレッジインパクトと大学評価に関する研究」（研究代表者：岩田弘三）の研究成果の一部をなす。

Evaluations about Their College Life by Alumni

IWATA, Kozo (Musashino Women's University)

It is possible that the alumni evaluate their college life in the different manners from their students' ages, because they have got more various social experiences now than their past collegiate ages. Therefore it can be useful for colleges to know the evaluations about college life by alumni. Then the primary aim of this paper is to clarify what kind of past college experiences they feel useful for their present social life. For this purpose we gathered data by questionnaires to alumni at five universities and two junior colleges in Japan.

Main findings of this study are as follows:

- (1) They evaluate their friendship, studying, and extra-curriculum experiences in their past college life, as well as the present students do so.
- (2) On the contrary, they evaluate lowly their dating and hobby activity experiences in their past college life, though the present students likely engage themselves in them.
- (3) Only the alumni who were devoted to either side jobs (Arbeit) or studying activities outside colleges (double-schooling) in their student ages evaluate each highly now.